2026/7/30

リトルハウス通信

支援の現場において「声掛け」という言葉がよく使われます。この言葉の意味は読んで字のごとく、クライエントの方とコミュニケーションをとるきっかけのことだったり、安心感を共有し合うための最初の一声の意味だったり「関係性をつなぐ行為」の総称として使われることが多いです。もっと広い意味では、支援者がクライエントの方のお話を傾聴し、そのお話に対して何かの返答や感じたことを伝える行為もまた「声掛け」に含まれると思います。

私自身、「声掛け」は対人援助においての基本であり、大切にしていかなければならないものと考えています。なぜならば、関係性の構築には必ずコミュニケーションが必要であり、コミュニケーションとは「意思の交換」を意味し、その為にはどうしても言葉＝「声掛け」が必要になるからです。しかしながら支援の現場において、この「声掛け」の必要性を強く感じているが故、空虚な声掛けをしてしまうことが時々あります。それは自戒の意味を込めてそう思っています。

例えばクライエントの方が、自身の辛い現状についてお話ししてくれた時、そのお話に感じ入り、心が揺さぶられ、何か少しでも寄り添えるような、力添えになるような声掛けをしたいという強い思いから言葉を生み出して伝えます。しかし自分の中から生まれたその言葉の軽さや力のなさに「違和感」を覚えたり、ならば、あえて言葉にせず、傾聴をすることのみが寄り添いになるのか等、迷いと葛藤が生まれるわけです。

私は「葛藤」と書きましたが、先日読んだ『「ゆらぐ」ことのできる力　ゆらぎと社会福祉実践』（尾崎：1999）の中で、まさにこのような状況にある支援者の心情を「ゆらぎ」という言葉で表現し、考察しています。この支援者が感じる「ゆらぎ」の考察はとても有名なものですが、改めて気づかされたことがいくつもありました。そこで今月と来月のリトルハウス通信ではこの支援者が感じる「ゆらぎ」をテーマにしてつらつらと書いてみたいと思います。

尾崎はこの「ゆらぎ」の原因として『人の生活の仕方や生き方に「つねに正しい画一的な答え」が存在しないからである』と述べています。それは『同じ障害をもつ人が複数いたとしても、それぞれの生活における障害の意味はみな同じではない。また、疾患を克服したある人の経験と病いを癒した別の人の道筋がまったく異なることもある。つまり、一人ひとりの生き方、生きる意味は同じではない』ために、クライエントの発言に「ぴったりと一致させる声掛け」をすることは至難の業ということになるでしょう。では私たちは「声掛け」というものをどう捉え「ゆらぎ」をどう解釈したらよいのでしょうか。次号でその考察を試みたいと思います。（鈴木）

■参考文献

尾崎新（1999）『「ゆらぐ」ことのできる力　ゆらぎと社会福祉実践』誠信書房